新詩發生時代の思ひ出

土井晩翠

青空文庫

ブランデスやテインヌなどに其例を見る通り、文學史を書く者の中には、勝手な豫定の觀念を基とし、これに當てはまる材料のみを引用して、何とかかとか纏りを附け度がる弊風がある。漢文學史の上にも澤山の類例があらう。元遺山の編と稱せられて、そして實際其編である事は間違ひない、と思はるゝ「唐詩鼓吹」に、明末清初の錢謙益（牧齋）が序文を書いて、中に明代三百年來の詩學の弊風を攻撃し、

『あゝ唐人一代の詩各々神髓あり、各々氣候あり、然るを初唐盛唐中唐晩唐と無理に區分して、隨て之を判斷し、此が妙悟、彼が二乘、此が正宗、彼が羽翼……など、支離滅裂して、唐人の面目を千歲の上に暗からしむ』（意譯）

と嘆じ、そして此弊風は嚴羽の詩論「滄浪詩話」と高廷禮編集の「唐詩品彙」とが責を負ふ可きものであると痛論して居る。

明治文學ももう過去のものとなつて、「明治小説史」「明治詩歌史」などゝ題するものが昨今可なり多い。

昭和二年頃に新潮社刊行の「日本文學講座」の中にも若干篇がある。『新詩發生時代の思ひ出』といふやうな題で何か書けと、畑中氏から先般依頼されて居たが、近頃或る事柄で頗る繁忙なので、濟まないが全く打ち捨て置いたが、原稿締切の期日が眼前に迫るので、慌て氣味に貧弱な藏書を調べると、右の新潮社の刊行があつた。そして其中に新詩發生時代を説く、「明治詩史」といふものを見附けた。可なりよく調べて居るやうだが、やはり文學史家の陷る弊風が無いでもない。

昨年の「國語と國文學」の夏期特輯、「明治大正文學を語る」（藤村作博士が巻頭に序して居る）八月號の編輯後記に『本誌自體が書き改められた明治大正文學史であると曰つても誇稱では無からうと思ふ』とあるが、私が課せられた題目の新詩發生時代に就ても面白い思ひ出が數々載せられてある、其中井上巽軒先生の御話がよく當時の實際を穿つて居る。

先生の御話中には無いが、明治最初刊行の新詩は福澤先生のである、即ち「世界國づくし」、七五調で世界地理を歌ふた當時の破天荒である。今日から見れば、まづい點のあるを免れないが、『五大洲』を韻文であゝ迄に歌ふといふ事が確に偉い、しかも是は全く先生の餘技である。見返しには——

『福澤諭吉著、素本世界國盡全三册明治五年壬申初冬、福澤諭吉賣弘』

とある、そして發端は——

『世界は廣し萬國は・おほしといへど大凡（オホヨソ）・五つに分けし名目は・亞細亞阿非利加歐羅巴・北と南の亞米利加に・堺かぎつて五大洲・大洋洲を別に又・南の島の名稱（トナヘ）なり……』

歐洲を歌つては——

『……國の大小強弱も・時勢によつて浮き沈み・魯西亞普魯士墺地利・英と佛との五ヶ國は當時日の出の五大國・……（歐洲は）人民恆の産を得て・富國強兵天下一……兵備整ひ武器足りて・世界に誇る泰平の・その源を尋るに・本を務る學問の・枝に咲きたる花ならむ・花見て花を羨むな・本なき枝に花は無し・一身の學に急ぐこそ・進歩はかどる紆路（マワリミチ）・共にたどりて西洋の・道に榮る花を見む』

これは昭和十年の今日でも傾聽するに足る、流石は一代の先覺で

ある。全篇三巻を讀み通すと、明治初年に於ける世界の大勢が朧げながら伺はれる。（書中の固有名詞などの書き方が頗る振つてゐるのも一興。内留河（ナイル）、比羅三井天（ピラミイデ）、尻屋（シリヤ）、羽禮須多院（パレスタイン）、奈保禮恩（ナポレオン）、和阿戸留樓（トルロー）、治部良留多留（ジブラルタル）、金田（カナダ）、輕骨田（カルコッタ）、荒火屋（アラビヤ）、衞士府都（エジプト）、麻田糟輕（マダガスカル）等々々）

但し流石の先生も、米國に行て其物質文明に眩惑されて、極端の米國崇拜となつたのは無理もない。

『…天の道理に基きて・國に報ゆる丹心の・誠に出でし一國の・不羈獨立の勢は・留めんとすれど止らず・北亞米利加の十三州・……十三州の名代人・四十八士の連判状・世界に示す檄文に・英吉利王の罪を攻め……失ふ生命（イノチ）得る自由・正理屈して生きんより・國に報ゆる死を取らん・一死決して七年の・長の月日の攻守（セメマモリ）・知勇義の名を千歳に・流す血の河骨の山・七十二戰の艱難も・消えて忘るゝ大勝利・……』

次に米國の建國と進歩とを謳歌して『工商は英國と比肩し、文教技藝は佛國に優る』と讃し、世界の四方より『衣食を逐ふ人の情』で、集り來る殖民の故に、人口三千餘萬に増加し、（日本も明治十五六年頃は「三千餘萬兄弟どもよ、守りにまもれ君が代を……」と歌つたものだ）東西一千三百里、南北七百里、十三州は三倍して『三十六州竝び立ち』……ニユーヨルク（入世留久！）は、人口凡一百萬・國中一の交易場である……と書いてゐる。福澤先生は其後「暗誦十詞」を明治六年刊行したと、今は故人たる吉野甫が、明治四十一年昭文堂刊行の「明治詩集」中の新體詩年表に書いたが、それはまだ讀むで居ない。

明治時代韻文刊行の第二は、其後十年ばかりを過ぎて、明治十五年四月の「新體詩抄」であらう。東京帝國大學（當時唯一の帝大）の外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎三博士の合編である。其第一頁は『ブルウムフヰールド氏兵士歸郷の詩』外山（丶山仙史）の譯、『涼しき風に吹かれつゝ……』である。

前記「國語と國文學」の井上先生の當時の追想談を讀むと、外山博士の熱心が窺はれる。今でも軍歌として時々ラヂオにも出て來る拔刀隊歌（明治十年西南役の歌）は其作である。『我は官軍我が敵は天地容れざる朝敵ぞ、敵の大將たる者は古今無双の英雄ぞ、之に從ふつわものは共に慓悍決死の士……』私は「東洋學藝雜誌」で初めて之を讀むだ（同誌に東京市の歌「あな變りたり武藏野や」といふのもあつたが誰れの作か覺えて居ない）。

其後又十餘年を過ぎて外山井上兩博士は共に明治廿八年初刊の「帝國文學」紙上に時々詩を發表した。『旅順の英雄可兒大尉』といふ散文詩（？）を外山博士は日清戰役時代に書いた。其頃皮肉屋の齋藤緑雨が、『新體詩見本』と題して外山、佐佐木（信綱）、與謝野鐵幹等諸家の口調を眞似て Parody を書いた。外山調に『火鉢の上に鐵瓶が・落ちて居るとて無斷にて・他人の物を持ち行くは・取りも直さず泥坊ぞ（「取りも直さず」は「即ち」）泥坊元來不正なり・雲を霞と逃ぐるとも・早く繩綯ひ追ひ駈けて・縛せや縛せ犯罪人。』

前の「新體詩抄」及び之から出發した竹内節の新體詩歌に歸るが、其中に井上博士はロングフエローの『人生（ゼサームオフライフ）の歌』を譯した。此原詩は米國の少年達は皆悉く暗誦して居るだらう。日本の少年達もさうするがよい。靈魂不滅と敬神と發奮努力と希望とを歌つてゐる。後に相模の海岸で溺死した矢田部理學博士は尚今居士の號でグレイ

の『哀歌（エレヂイ）』を譯した。

『山々かすみ入相の・鐘は鳴りつつ野の牛は・徐に歩み歸り行く・耕す人もうち疲れ・やうやく去りてわれ獨り・たそがれ時に殘りけり。』（首節）

『此處に生れてこゝに死に・都の春を知らざれば・其身は淨き蓮の花・思は澄める秋の月・實（げ）に厭ふべき世の塵の・心に染みしことぞなき』（十九節）

『これより外に此人の・善惡ともになほ深く・尋ぬるとても詮は無し・たましひ既に天に歸し・後の望を抱きつつ・神にまぢかく侍るなり』（終節）

恐らく當時第一の好譯詩であらう。曰ふ迄もなく原詩は不朽の傑作である。私は十四五歳の頃、この譯詩を非常に愛讀した。そして親戚の庄司（當時駒場農學校生「わかもと」の澤田博士の友）が原詩を有したのを借りて來て覺束なくも讀んで見た、或は寧ろ（當時やつとＡＢＣを習つたばかりだから）眺めたといふ方が正しからう。西詩に對する私の愛好は多分これからであつただらう。

『ハムレツト』中の有名の獨語〝To be or not to be……〟の譯も詩抄中にあつた。――

『ながらうべきか但し又・ながらふべきに非るか・是が思案のしどころぞ……』途方も無い譯であるが、是に因て私は初めてシエイクスピヤの名を知つた。

小學時代には父（擧芳と號した父）の感化で太閤記、八犬傳、三國志、水滸傳などを、又教科書としては、就中十八史略を愛讀したが、其後十八歳迄の獨學時代、竝に之に續く時代に影響を受けたものの中に、その頃創刊の「國民の友」又日刊の「自由の燈」がある。前者の明治二十二年の文學附録「おもかげ」などは最も好んで讀んだ。『みちのくの眞野の茅原遠けどもおもかげにして見ゆとふものを』から題を取つたもの、落合直文、森林太郎（鷗外）等諸先生の西詩譯集である。後者は怪傑星亨の機關新聞で、猛烈に薩長政府を攻撃した。此紙上で千八百八十五年ユーゴーの逝ける時、二三十回に連載した此大文豪の傳記評論を讀んで多大の感激と印象とを得た。

明治二十一年十八歳で二高に入學、補充科一年、豫科三年、本科二年の科程を、六ヶ年かかつて終了したが、其頃に山田美妙や尾崎紅葉や幸田露伴先生が現はれた。山田は言文一致體――今日の口語體の先鋒で金港堂發行月刊「都の花」の花形であつた。末路は悲慘であつたが、彼の遺した文學上の功績は斷じて僅少でない。紅葉は『七生文章に盡さん』と其後臨終の際に曰つた通り、彫心鏤骨の文章を書いたのは尊い。露伴先生が明治二十二年（二十三歳で）「風流佛」（新著百種第五卷）を、翌年つづいて「對髑髏」（初名「縁外縁」）を著はされたのは私共にとつて駭心張目の對象であつた。故内田魯庵が『此兩作を書いた露伴は只に明治文壇とのみ曰はず、世界文學界の珍である、眞に百世稀に出づる天才の面影は此作に最もよく現はれてをる』と激賞した。（春陽堂の明治大正文學全集第六卷第六百六十六頁、柳田泉氏の解題による）

日清戰爭の初めの年明治二十七年、仙臺から始めて出京して東京帝國大學英文科に入つた。文學部長は我々が大入道と綽名した外山博士であつた。井上哲次郎博士が獨逸から六年餘の留學を卒へ、歸朝して萬丈の氣を吐いたのも其頃である。翌年所謂赤門文學「帝國文學」（月刊）が創刊された、第一號に序を書いたのは高山樗牛であつた。編輯委員は哲學科の高山、國文科の鹽井（雨江）大町

（桂月）佐々（醒雪）英文科の上田（柳村――敏）であつた。初號中の一長篇に對して反感を抱いた某雜誌（名を忘れた）が『長いことろくろ首のへどの如し』と冷評した。

「帝國文學」は又時々名士を聘して講演を開いた。其何回目かに矢野龍溪、福地櫻痴のを私が聽いたのは小石川植物園に於てであつた。龍溪の莊重な態度は今でも目に殘る。孔明を歌へる杜少陵の句『宗臣遺像肅清高』が思ひ出される。これより先、明治十七年、彼は「齊武名士經國美談」を著はして所謂洛陽の紙價を高からしめ、我々少年時代の隨喜渴仰の的であつた。エパミノンダス、ペロピダス等の名は之に因て我々の熟知する處となつた。彼は國家經綸の才を以て自ら任じて抱負が甚だ高く、本書の自序に、『……小説の世に於ける音樂畫圖の諸美術と一般、尋常遊戲の具に過ぎず、本書を讀む者亦之を遊戲具を以て視る可なり……』そして卷後に七絶を題して曰ふ、

『年少誤懷天下憂・時々深夜聞鷄起・半生事業何所成・枉向燈前編小史』

彼は眞正の文學の偉大を（時代が時代ゆゑ）分らないのである。「經國美談」の二十二年前即ち千八百六十三年『レ・ミゼラブル』に大ユーゴーの序した左の文と對照するも善からう。

『法律及び慣習の力を假りて一種の社會的處罰が此世に存し、文明のただ中に人爲的地獄を造り、人界の災難を以て神聖の運命を紛糾せしむる限り、――現時の三問題、貧困による男子の墮落、飢餓による女子の破滅、暗夜による小兒の萎縮――の解放されざる限り――或方面に於て社會的假死狀態の可能なる限り――（更に一層廣き見地より換言すれば）地上に無知と悲慘との存せん限り、本書の如きものは無用ならざるべし』

なほ後に引用するエマスンの言も參考になる。明治二十九年第二回「帝國文學」委員に擧げられたのは、故藤岡勝二、故岡田某、青木昌吉、戸川秋骨の諸氏と私とであつた。委員となつた以上、集る原稿の不足な折は、何とかして豫定のページを滿たさねばならぬ。さういふ次第で時々詩作などを同誌上に載することゝなつた。唐人の七絶の句『紅葉青山水急流』を取つて題とした一篇、シラの『理想』中の四行を初めに引いたのが其一例である。三十年英文科を卒業した時の同級者に今の女子學習院長長屋順治氏また故上田柳村（敏）があつた。上田の母堂は明治の初め津田梅子や、後に大山公爵夫人となつた少女達と共に、十歳前後で米國に留學したのである。上田が英語英文に長じたのは勿論母堂の感化であらう。此秀才は又佛語が得意で、「海潮音」中に近代の佛詩を（獨伊等のもあるが）頗る巧に譯した。元來詩の完譯は殆んど不可能のものだが、さすが柳村の技倆は、殆んど不可能なるものを可能とした。ルコント・ド・リイルの譯、エレデアの譯は其適例である。惜しいことに、彼の創作は極めて少數である。ちと脱線であるが、譯詩についての面白い話は、シラの『ワーレシユタイン』を、サミユール・テイラ・コレリヂが英譯した事である。詩才はコレリヂが勝ると思はるゝが、彼が獨逸に一ヶ年ばかり滯在の時に試みた其譯は、詩才に任かせて隨分勝手に書き直した點がある。それを原作者が讀んで感服し、『成るほど！　かうするが善い』とて、原作を書き換へたといふ事だ。詩壇上極めて稀有の美談珍談であらう。

島崎藤村君が「若菜集」を春陽堂から出版したのは、明治三十

年と覺ゆる、是が眞に新時代を劃する傑作であることは今更曰ふ迄も無い。先輩として敬意を捧げるに躊躇せぬ。私の第一詩集「天地有情」は之より二年おくれて三十二年の四月博文館から刊行された。この中には『星落秋風五丈原』『暮鐘』などが含まれてある。初め此刊行を申込んだが『そんなものは眞平だ』と斷はられて、大にしよげた時『可愛想に』と同情を寄せて同館の大橋乙羽を説服して澁々之を出版せしめたのは、博文館に當時深い關係のあつた故高山樗牛と故久保天隨（後に臺灣帝大の漢文學教授）の兩博士であつた。其時の原稿料は三十圓内外であつた。印税などは思ひもかけなかつたのである。之がフロツクコート一着の代價となつたなどは、今更思ふと可笑しくもあり馬鹿々々しくもある。此集は出版者及び著者たる私の豫想外に頗る讀詩界に歡迎された。彼此百版近くも刊行されたらしい。集中の『星落秋風五丈原』に關して一寸面白い話がある。此詩は明治三十一年十一月號の「帝國文學」に初めて載つたものだが、其直後に、上野の動物園で東印度生れの猩々が死んだ。前年着いて大評判になり、遂に天聽に達して宮城の中に召され、叡覽を忝うしたほどであつたが、風土に適せず寒氣に犯されて遂に斃れた。これに關して坪谷水哉君が「文藝倶樂部」（三十二年一月號）に『猩々の追善』と題して頗る面白い長文を書いた。其大意を述べると、動物園内で、一月二日第一月曜の休日（人間の縦覽を許さぬ日）に、猩々舊棲の鐵柵の前で、追善會を催うした云々、年番幹事の猪が喪主となり、親類總代の猿が弔文を讀み、つづいて鸚鵡は某氏の『星落秋風五丈原』の假聲をやつて、一篇の和讃を歌ふた……云々その和讃の題は『星落秋風動物園』である。左に原詩の第一節と和讃とを對照する。

祁山悲秋の風更けて、
陣雲暗し五丈原、
零露の文は繁くして、
草枯れて馬は肥ゆれども、
蜀軍の旗光なく、
鼓角の音も今しづか、
丞相病篤かりき。

上野の山に風あれて、
時雨降りしく動物園、
北海道の羆（ひぐま）さへ、
寒さに頸を縮むめり、
況して天竺熱帯の、
野山に育ちし動物が、
寒氣に得堪へでゆくりなく
健康傷るぞ是非もなき、
猩々病篤かりき。

水哉君の此の名文（と曰ふてもよからう）――其終に象と虎の弔

辭がある。『象は眞言宗と見えて、鼻の先に香を摘んで、香爐に不恰好に振り撒き、「象撒くサンザンだ（ノーマクサンマンダのもじり）ベーロシヤナア」と唱へて退く……虎は禪宗と見えて「南無迦羅タンノウ虎ヤー虎ヤー」（これでお仕舞）』と結んでゐる。

其後私は「曉鐘」「東海遊子吟」「曙光」「天馬の道に」「アジアに叫ぶ」譯詩としてはバイロンの「チヤイルド・ハロード」（全譯）などを出したが、世間一般は私を主として「天地有情」の作者と見なしてゐるらしい。こんなことを曰ふのは憚るべき次第かも知れぬが、「天馬の道に」を比較的善いものと自分では考へてゐる。世界大戰終了の後二年、一千九百二十年三月の出版、イタリヤのダヌンチオが、東亞飛行の壯擧決定と聞いた後、大正八年九月十八日、全體の構想が一夜に成り、尋で聯想の翼の擴がるまにまに補足して成つたもの、三十六章から成るが、各章皆獨立の一篇として讀んで差支ない。天馬ペガサスが天翔ける道を飛來する南歐の詩人を歡迎する其序詩は初め「中央公論」に載つた。之を誰かが當時イタリヤ滯在の下位春吉君に送つたと見えて、同君は詩人エンリコ君と共に之をイタリヤ語に譯してナポリの書店から發行した。ダヌンチオ詩宗が之を讀んで激賞したといふことを、下位君から當時伊國漫遊中の故二高校長武藤虎太郎君を通じて報道された。

「激賞」とは大割増だらうが、一寸嬉しくないことも無かつた。序詩の伊譯はさすが伊語の性質上原作以上である。

前に戻るが「天地有情」出版の折は『坊つちやん』形氣で、序の中に『…詩は閑人の囈語に非ず…』とか、例言の中には『詩を遊戲と見なし、閑文字と見なすのは、古來の習慣であるが、此弊風が敗れぬ中は眞の詩は起らない、一般讀者の詩に對する根本觀念を刷新するのが、今日國詩發展の要素である』などゝ書き、附録に歐洲諸文豪の詩論或は詩人論を譯載した。カーライル、シエリイ、ジヨージ・サン、エマスン、ユーゴーのそれである。右例言中の『古來の習慣』は今思へば『或時代の習慣』と訂正すべきであらう。カーライルのは「英雄崇拜論」の第三講にいふ處、シエリイのは「詩の辯護」にいふ處、――私は今でも當時とひとしく、シエリイを英國最大詩人の一と信じ、シエイクスピアに次いでの英國第二位の大詩人の候補者（スペンサア、ミルトン等と共に）と仰ぎたい。彼は――『詩は人意を以て致すべきでは無い、我れ詩を作らうと人は曰ひ得ない、最大詩人も曰ひ得ない』と曰ふ、體驗からであらう。大ゲーテが『偉大の詩……は自己の力で出來たのではない、靈の惠である』とエツカマンとの對話中に曰ふ處と一致してゐる。

シエリイはオツクスフオード大學生時代、青春の客氣に驅られて、「無神論の必要」を書いて退校處分を受けたが、其後の作を讀むと、無神論どころか、神祕な宇宙の大虛に對して深甚の崇拜を捧げてゐる。三十歲ばかりで南歐の海に溺死したが、ゲーテ、ユーゴー、カーライル……の如く八十餘歲の長壽を保つたなら、どれほどの大作を人界に殘したらう。

エマスンのは論文集第二篇の『詩人論』からである。――

『宇宙に三兒がある、知る者、行ふ者、言ふ者、即ち眞を愛するもの、善を愛する者、美を愛する者、――三者は同等である。詩人は言ふ者で、美を代表する、……詩人は副王でない、自個の權に於て帝王である、……俗人は只行爲活動を尚び、爲さずして曰ふ者を排斥する、詩人が言者で、述言の爲めに此世に下されたこ

とが分らない。ホーマアの言の尊いのは、アガメムノーン（希臘の英雄）の勝利の尊いのと同様である。詩人は英雄を待たない、聖人を待たない……』

ユーゴーのは「光と暗」（一千八百四十年刊行）の序全部で、例の如く飽く迄も意識的に自己の抱負を述べたものである。

『……（完美の詩人は）係累が無い、桎梏が無い、意思と行爲と共に等しく自由である、……一切の艱難を憐むに於て自由である。一切の敬信を尊ぶに於て自由である。……自然界の中に生き、活世界の中に住み、……好友として原野に春を眺め、玉樓に王侯を望み、獄裏に囚人を見る……』

詩及び詩人に對する是等の評に對して、私は今日も何等反對すべきものを見出さない。

明治卅三年正月、故郷仙臺にある第二高等學校に仕官し、卅四年海外漫遊に出かけ、卅七年秋、日露戰役の最中歸朝し、翌年再び二高に就職して爾來三十餘年、既往は眞に一夢のやうに感ずる。昨年、本官を辭したが、今なほ講師として奉職して居る。同僚中には、日露戰役後三年に生れた若い方もある。いつ迄も青年氣取りで、たまに晩翠翁なぞ新聞紙上に書かれると内々大不平だが、何とも致し方がない。呵々。

與へられた枚數が盡きたから、こゝで擱筆する。

（附言）昨年秋出版の隨筆集、「雨の降る日は天氣が悪い」の序言中に述べた通り、私の姓は從來ツチヰと發音し來つたが、種々の理由でドヰと改音した。序ながら一寸こゝに書く。

青空文庫情報

底本：「明治文學全集　58　土井晩翠　薄田泣菫　蒲原有明集」筑摩書房
　　1967（昭和42）年4月15日発行
底本の親本：「中央公論」中央公論社
　　1935（昭和10）年7月号
初出：「中央公論」中央公論社
　　1935（昭和10）年7月号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：小林繁雄
2006年7月2日作成
2015年10月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新詩發生時代の思ひ出

土井晩翠

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/